

2015 さようなら原発・核燃「3.11」青森集会

記 録 集

○日時：2015年3月15日（日）・11時00分開場

○場所：リンクステーション青森・大ホール



発行 なくそう原発・核燃、あおりネットワーク

共同代表 浅石 紘爾（核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団・代表）

大竹 進（青森県保険医協会・顧問）

鳴海 清彦（青森県農業者政治連盟・委員長）

事務局 青森県保険医協会 住所 青森市松原1-2-12 電話 017-722-5483

FAX 017-774-1326 <http://nakuso-gk.net/>

目次

開会挨拶—鳴海清彦当会共同代表	1
基調報告—大竹進当会共同代表	1
特別講演—「津軽海峡・核の冬景色」—アーサー・ピナードさん	4
大間原発に反対する会—奥本征雄さん	14
花とハーブの里—菊川慶子さん	14
核の中間貯蔵はいらない下北の会—野坂庸子さん	15
大間原発反対訴訟の会（函館市）—竹田とし子さん	16
閉会の挨拶—浅石紘爾当会共同代表	17
決議	18
なくそう原発・核燃、あおもりネットワーク 加入団体	20



大間原発訴訟の会（函館市）の
「タルチョ」旗



デモ隊先頭—YAMさんらが
太鼓等で盛り上げる



青森県庁を包囲して
「原子力施設反対」をアピール

開会挨拶



鳴海清彦共同代表

3.11 青森集会にお集まりの皆さん、県内から、そして全国から、大変ご苦労さまです。今日は3月15日、くしくも4年を迎えた3月11日、この青森県は猛吹雪に遭いました。私は、弘前市に住んでいますが、弘前市では一夜にして30センチもの雪が積もり、積雪が97センチに戻ってしまいました。正しく4年たっても、22万人を超える被災された方々が家に戻れない。そのなかでも福島県の12万人を超える人が自分の家に戻れない。そして福島県民のその怒りが、この津軽に雪をもたらして、「3月11日を忘れるな」というふうに、私どもに強いメッセージを天から送っていただいたというふうに、非常に私も心に深く思いを刻みました。

思い起こしてみれば、4年経っていますが、何一つ現状は回復されていない。福島県、そして東京電力福島第一原子力発電所の汚染水問題やら、いろいろなことです。私たちの毎日の生活にも、またこの青森県にも、大きな疑問を投げ掛けています。先般の安倍総理大臣の再稼働の発言は許せない。再稼働なんてとんでもない。アンダーコントロールなんて誰が言ったのか。今日のこの集会で、また皆さんとともに、3.11の被災された方々の思いを、また私たちの声が安倍総理大臣に届くように、また、世界に届くように、この大会を機

に、いっそう強力な活動を続けていただきたいと思います。本日は大変、ご苦労さまでございました。

基調報告



大竹進共同代表

今年は20分間だけ時間をいただきましたので、スライドを使って報告させていただきます。

最初のスライドは大飯原発差し止め判決を皆さんと一緒に読んでみたいと思います。人格権は、これをを超える価値をほかに見いだすことができないという画期的な判決を出していただきました。そして、笠原一浩弁護士が、小学生のための大飯判決の意義ということで、「美しい地球で豊かに暮らす権利は電力会社がお金を儲けるよりも大切にされています、だから原発を再稼働してはいけません」と解説していただきました。

次に、3つのことをお話させていただきますが、最初は核のごみについてです。

核のごみのなかでも、プルトニウム239という放射性物質は半減期が2万4,000年です。宇宙が誕生したのは138億年前、地球が誕生したのは46億年前、ホモサピエンスが誕生したのは20万年前、三内丸山も含めて文明が現れたのは5,000年前です。一方、青森県の男性の平均寿命は77歳、女性は85歳です。プルトニウム239の半減期は長い長い期間であることが分かります。世界中で

たまったプルトニウムは1,000トンを超えています。アベノミクスは、社会保障の次世代への付け回しは問題にしていますけれども、核のごみの次世代への付け回しは隠そうとしています。核のごみは「処分」といわれています。「処分」というと、なんか無害、無毒化されるような印象を受けますけど、実は処分ではなく、「生物圏からの隔離」であるというふうに述べている人もいます。原発も再処理施設も、有効寿命が過ぎれば、すべて廃炉になってしまいます。そして廃炉施設は、すべて核のごみになってしまいます。MOX燃料は、1回は処理できますが、それ以降は、再処理はできません。核のごみは隔離、管理するのみになっています。

青森県の核のごみについてまとめると、東通原発、東北電力1号機の使用済核燃料は600体を数えるそうです。六ヶ所村で保管されているガラス固化され英仏から返還された廃棄物は1,500本以上、六ヶ所村で再処理した廃棄物は既に346本です。そして、全国各地から集められた使用済核燃料は2,957トンにも達しています。プール全体の規模は3,000トンですから、もう満杯になっています。更に、一番危険なのは、高レベル放射性廃液、液体状のごみがあります。高木仁三郎先生が、この高レベル放射性廃液1立方メートルが漏れた場合の1カ月の被ばく量予測を地図にしました。たった1立方メートル漏れただけで、青森県の全員が避難しなくてははいけません。乳幼児の避難の範囲は仙台を超えます。そして許容線量では、名古屋まで広がります。

六ヶ所村の再処理工場貯蔵施設には、今年の3月1日現在、この高レベル放射性廃液は223立方メートルあるといわれています。今、問題になっている福島県の原発から漏れた放射性セシウムは、小出先生によると僅か750グラムだったそうです。牛乳パック1本にも満たない重さの放射性物質が日本中を汚してしまいました。六ヶ所村にある高レベル放射性廃液は、もっともっと巨大な量が保存されています。この廃液は51時間、全

電源喪失すると沸騰、爆発しますが、日本が壊滅することになります。

では、ゴミはどうするのかということですが、現在、有効な処分・管理の方法はありません。原子力市民委員会は「再処理はせずに直接処分する。そして、使用済燃料は発生サイトで保管する。廃炉もゴミも、発生サイトで保管する」ことを提案しています。今、原発や核燃、そのゴミをどうするかについて、青森県民の意見は大きく二つに分かれています。それに対して、直接民主主義を保障する県民投票条例をつくり、徹底した情報公開を行い、誰もが認める事実に基づいて、自由で開放的な議論を積み重ねることによって、皆さんが納得できるような方法論が出てくるだろう。これが公論形成と言われています。

もう1つは、健康被害です。先頃、鼻血で問題になりました。鼻血は放射線が原因ではないという議論が行われていますが、放射線によって白血球や血小板が減って鼻血が出ることは起こり得ません。じゃあ、なぜ鼻血が出るのか。その可能性について西尾先生が述べています。これは浪江町にあった軍手やハサミやスリッパや長靴です。それをレントゲンのフィルムの上に置いておくと、放射性物質が出て、レントゲンフィルムが感光します。手袋に放射性物質が点々と付いています。ハサミにも、スリッパにも長靴にも付いています。

実は、汚染の原因はセシウムだと言われていて、セシウムは水に溶けると言われてきました。しかし最近、セシウムはメルトダウンした所から出ましたので、金属と融合して、こういった粒々で水に溶けないセシウムパーティクルになっているということが分かってきました。つまり、これは体の中に入って、この粒々がどこかで留まることによって、その周辺の組織が被曝することが予想されます。セシウムパーティクルが鼻の粘膜に付いて、長時間にわたりベータ線を出し続けて、その粘膜が赤くなって腫れて血を出すことによって、今までなかったような鼻血が出る可能性が指摘されています。

一方、小児甲状腺癌が100人を超えたというニュースが届きました。放射性ヨウ素というのが、甲状腺癌の原因です。この放射性ヨウ素は、3月15日の朝6時、2号機の爆発によって大量に放出されたと言われていました。これがその当時の拡散の地図ですが、北関東にまで及んでいます。放射性ヨウ素の半減期は8日ですので、山下さんは、4月にはもう放射性ヨウ素は大気中になくなっていて、マスクをしなくても良いとお話をしました。そして、福島の子供では4月6日から学校が再開され、マスクもつけずに屋外で活動していました。ところが、後で分かったことですが、いわき市の水道水から4月2日にも放射性ヨウ素が検出されています。さらに、福島県内の小学校の校庭の土壌から4月5日の時点でも、放射性ヨウ素が検出されていることが分かりました。山下さんが言ったことは嘘だったこととなります。

そして、NHKスペシャルで放射性ヨウ素の大量放出は、3月15日の朝ではなく夜の20時から翌朝の3月16日の1時までだったことが分かったと報じました。その後も次々色々な新事実が明らかになっています。これからは更にいろいろな事実が明らかになってくると思います。

甲状腺癌については、1巡目、111人が甲状腺癌あるいは甲状腺癌の疑いと発表になりました。つまり、子ども10万人の中で43人が甲状腺癌だったこととなります。これは疫学的には有病率とよばれ、ある時点で、何人の患者さんがその病気にかかっていたかという率となります。その後、2巡目の甲状腺癌の検診が始まり、新たに8人が甲状腺癌であることが分かりました。これは1巡目では、全く異常がなかったと言われた人の中から、甲状腺癌が8人見つかった訳ですから、1巡目と2巡目の間に甲状腺癌が発生したということになります。これは疫学的には発生率と言われて、1年間で10万人あたり何人発生するかというデータとなります。この1巡目と2巡目の期間が今の発表では不明ですが、記者会見では最大2.5年と

述べていますので、最大を取って見ますと、発生率は10万人当たり9.9人になります。これが1年であれば、もっともっとデータが大きくなりますが、この福島の発生率は、事故前の発生率に比べて約10倍にもなっています。これは、チェルノブイリの10年後の発生率に匹敵する数字になっています。

甲状腺癌についてまとめると、福島県で小児甲状腺癌の発生率は上昇しています。今後、チェルノブイリよりも多くなるかも知れません。放射性ヨウ素の放出の実体は不明で、最近ではチェルノブイリよりも多かったのではないかと予想されています。今後も新事実が出てくるでしょう。福島県に限らずに北関東や東北でも、希望者には甲状腺癌検診を行うべきだと考えています。2011年に0から5歳だった子どもたちが、一番、ハイリスクだと言われています。そして、チェルノブイリではその後に生まれた子どもたちにも甲状腺癌が発生しています。是非、このハイリスクグループの子どもたちを対象にした検診をするべきだと考えています。

3つ目です。原発・核燃マネー中毒から離脱する為にどうするのかと言うことです。

原発・核燃マネーについては、電源開発促進税に基づいて、電源三法交付金が各自治体に配られています。このお金は、1kWh当たり0.375円ということで電気料金に含まれていて、皆さんが払っているものです。もう1つは、核燃料核物質等取引税です。立地・周辺自治体が1割で、残り9割は県が貰っている税金があります。2015年の予算額では195億円です。とても大きな金額だと思われるかも知れませんが、本当かどうか他の数値と比べてみましょう。今回、消費税が3%値上げになりました。それによって、県に入ってくる消費税の増税分が59億円あるそうです。消費税が僅か3%上がっただけで県の増収が59億円、それに対して核燃料取引税が195億円ですが、この辺の金額については、皆さんが判断していただきたいなと思います。

一方、立地自治体である六ヶ所村あるいは東通村には、固定資産税が入ります。まあ、そのほか寄付金があると言われていています。この電源三法交付金、皆さんも少し貰っているのではと感じていると思います。エネルギー総合対策局で、1981年から2013年までの期間のデータが公表されています。それによると、沢山の金額が交付されましたが、有権者1人当たりで、この電源三法交付金を割ってみると、一番多く貰っているのは東通村、328億円で1人当たり556万円。意外にも六ヶ所村が2番目で543万円でした。さらに、大間町、むつ市、三沢市、十和田市と続きます。青森市も貰っていますが、1人当たり1,288円です。八戸市はたった1,064円です。弘前市、五所川原市などは3,700円程度です。片や500万円、片や1,200円、これが電源三法交付金がある有権者1人当たり配られた金額です。つまり、県民の8割が10万円以下で、2割の県民だけが10万円以上の電源三法交付金を貰っているということです。この数字を元に皆さんで考え、議論をして行ければと思います。

核燃料取引税が県税に占める割合を考えてみました。2014年、2015年、これは予算ベースになっています。年によって違いますが、徐々に増え、来年度予算では195億円ということになっています。県のベースとしては14%程度と報告されています。これらのお金については、今後どうして行けば良いのかについては、原子力市民委員会が脱原子力政策大綱を発表しています。是非、皆さんもこれをお読みいただいて、これで良いのかどうか、多くの皆さんと議論をして行きたいと思っています。それに因れば、脱原子力基本計画を作成し、核燃料貯蔵に法定外普通税をかける。核燃料を貯蔵している所で税金をかける。それで収入を得ることが出来ます。それから、電源開発、促進税に関しては、脱原子力・エネルギー転換税というふうに変えて、同じように、税金をかける運用する。それから電源三法交付金に関しても、エネルギー転換交付金として、今まで通り自治体に交付すると、提案されています。

最後になりますが、理不尽が通り、不条理が連続する日本や世界で、諦めかけている人が沢山いると思います。でも、諦めるのはまだ早いです。青森の原発・核燃政策が変われば、日本の原発政策も変わります。諦めない青森県を掲げて、原発と核燃をなくし、自然豊かな青森県を目指していきたいと思っています。青森を変えて、日本を変えましょう。ありがとうございました。

特別講演—「津軽海峡・核の冬景色」



アーサー・ピナードさん

青森放送のラジオ番組に出るようになって20年。もう人生の半分近い期間を青森県と深く付き合いながら過ごして来ました。こんなに不謹慎なタイトルを使ったのは初めてです。しかも、阿久悠さんにも、三木たかしさんにも、石川さゆりさんにも断らずに、核の冬景色にしちゃったという。ちょっとこれ、やばいなと思いながらも。

でも、津軽海峡、その美しさと魅力の感動を抑えて、冷静に今津軽海峡がどういうふうに使われているのか。権力者によって、津軽海峡がどんな状況に置かれているのか、正に核の冬の景色が広がっていると思います。その景色に一番、敏感に反応して、なんとか、そういう核の冬の景色にならないようにしようとしているのは函館市民です。津軽海峡の対岸の青森県の側にいる僕らも立

ち上がって、最悪の結果にならないようにしたいと思って、こういうタイトルにしました。

こういう核の話、あるいは経済の話、日米同盟を含めた自分の母国の世界戦略の話をする時に、時々聞いてくれた方から、不思議がられるというか疑問を呈されることがあります。僕は肩書が詩人で、政治評論家でも経済学者でもない。リスナーや読者から、「アーサーは詩人なのに、どうして経済の話ばかりするのか、詩人なのに、なんで核廃絶の話をするの」とか言われたりもします。でも、僕自身、あまり文学と政治、経済の境目がなくて、僕の中では、どういうふうに線引きしたらいいか、分からない所があって、経済は全部、文学の題材になり得るし、文学の視点で経済あるいは政治的な問題を見ると、色々なことが炙り出されるので、文学と経済、文学と政治、文学と核を何か分ける必要なんかないと感覚的に思います。でも、多分僕が、しつこくこういう問題に色々取り組もうとしている背景には、もうちょっと、深い所の文学の存在意義が関わっているという気がします。

今日は、「津軽海峡・冬景色」は歌わないので1時間でお話しは終わりますが、もし、どうしても歌の聴きたい方は、八甲田丸の所に行くとも自動的に流れますので、僕が歌わなくても大丈夫です。でも、もう1曲、違う歌で僕にとっては大事な歌があります。皆さんも何処かで、耳にしたことがあると思いますが、『どじょっこふなっこ』という歌です。この青森で初めて聞いて、覚えて、そしてこの歌が、僕がどうして、政治や経済について、いろんな発言をするかという、その根拠が見えてくる作品です。

上手く歌えないですけど、♪春になれば、しがこも溶けて、どじょっこだの、ふなっこだの、夜が明けたと思うべな、みたいな感じですよ。この、どじょっこだの、ふなっこだのって、“だの”を付けると、ちょっとばかにしているのかなって。一見、そういうふう感じられるけど、そうじゃなくて、これはすごく親しみを込めて、なんか仲

間として捉えてるような感覚で、しかも、このふなっこだの、どじょっこだのって、その池とか沢とかね、田んぼのところに水がある、残っている所にいる、この生き物を、歌を作った人、読み人知らずの歌なんですけど、作った人が、人間の上から目線で、人間が動物を見下して捉えるような感覚じゃなくて、本当に仲間になって、このドジョウとフナの身になって、それで歌っています。

だって、春になれば氷が、しがこも溶けて、それで、そのドジョウとフナは、きっと、長い夜が明けたと、そういうふう思うんだらうなって、歌っているのです。つまり、フナを見下す、上から目線の対象じゃなくて、彼らがどういうふう世界を見ているのかなあーと思って、一所懸命、その長い冬を泥のなかで過ごして、そして春が来た時に目覚める。その彼らの感覚で世界を捉えようとしています。これを、文学の世界では感情移入と言います。相手の身になって考える。相手の感覚を自分の感覚にして、そして何かを語ったり、歌ったりするという。正に、ふなっこ、どじょっこの身になって、この春が来るってどういう感じかなって。僕らは冬の間でも、毎日起きたり、食べたりしているけど、彼らはちょっと時間の流れが変わるから、なんか長い夜がやっと明けたって、きっとそういう感覚だらうなっていう感じです。

夏になれば、わらしこ泳ぎ、どじょっこだの、ふなっこだの、鬼こ来たなと思うべな。鬼が来たって、そうだよ。子どもたちが池に入って大変な騒ぎになると、フナとかドジョウは大変なんです。捕まえられて、カゴに入れられたりする。こういうふう子どもたちを、人間の子もたちだけけど、この歌を作った人は、ドジョウの身になって、その視点で捉えて、それで短く面白く、鮮やかにこういうふう語る。これが文学の基本です。文学は自分の殻に閉じこもって語るのはなく、自分以外の存在を認めて、その存在を大切に、自分以外の存在を、その世界を見る大事な装置として使って、で、そこから生まれた面白

い言葉がみんなに伝わる。そうすると、この『どじょっこふなっこ』の歌もそうですけど、この歌を聴いて、そして歌った人たちは、みんな歌っている間は、聴いている間は、フナとドジョウの身になって楽しい。だからみんなの視点を、視野を広げてみんなの視点を変えることが、文学の一番基本的な作用です。

これをやるということは、その、フナ、ドジョウ、ナマコ、マグロ、周りの動植物、周りの人々を世界を見るレンズとして、その豊かさの源として捉える。ふなっこ、どじょっこの身になって、その世界を見たことのある人は、汚染水の問題を無視することは出来ないでしょう。今、福島県の浜通りという所で起きていることを、無関心でそれを無視することはあり得ないです。だって、一番真っ先に被害を受けているのは、ふなっこ、どじょっこです。一番、殺されているのは太平洋の生き物と、里山の生き物。彼らが一番、集中攻撃を受けて、一番、被曝させられて、終わりのない被害を被っているのです。

人間に対してどのぐらい危険かということ、専門家はいつもデータを出しながら語るんですね。先ほどもありましたけど、鼻血が出るか、出ないかみたいな。そんなこと知るか。どじょっこに聞けて。どじょっこの鼻血はどうなっているのだから。そのデータを出せって言いたい、つまり、その鼻血が出るか、出ないかで、これは問題なのかどうかということ語る、それを語ること自体がもう、狭い中に問題を無理やり閉じ込めて、狭い中に、その問題をしまい込んで誤魔化そうとする狙いが見え見えです。

もっとその他の生き物への影響も含めて考えないと、僕らの、人体への本当の影響、長期にわたる影響は、捉えることが出来ません。人間よりも敏感にあの物質に反応する生き物がどうなのか。彼らが今、どうなっているのかも考えないといけない。ですから、蝶々がどんな影響を受けているのか、一所懸命に研究している方もいます。その研究は、僕らの生命がこれからどうなっていくの

かとも直結してくると思います。文学者だったら当然、今、浜通りで起きていることについて語らなきゃ、文学者じゃないと思うし、津軽海峡が今、抱えている問題も、詩人として、一市民として、それから一匹の、その生物として、ちゃんと向き合わないといけないと思います。

もう1つ、僕がしつこく核の問題といつも向き合っている理由は、多分に僕の生まれ育ったミシガン州にあると思います。僕はミシガン州デトロイトの近くに生まれました。デトロイトから100キロも離れてないエリー湖という大きな湖のほとりに、フェルミ原発という原子力発電所があります。フェルミ原子力発電所の2号機が稼働している。僕の従兄弟の家から5キロも離れてない。実は1号機が最初に作られて、それが今、廃炉になっています。廃炉と言ってもそのまま、そこに残っている、1号機が作られたのは1963年に工事が始まったんです。

そして、僕が母親の胎内にいた時、1966年の秋に、フェルミ原発1号機がメルトダウンしたんです。皆さんは聞いたことないと思います。話題にしないメルトダウンです。話題にするメルトダウンと、話題にしないメルトダウンがある。話題にするメルトダウンは、だいたいソ連とかがやってるやつ。アメリカでやるやつは、話題にしないメルトダウン。そういう振り分けがちゃんとある。日米の原発協定に書いてあるかどうかは分からないけど、そういうふうに使われます。ですから、ネットで探しても、そんなに日本語で出てくることはない、出てきたら、僕の名前がくっついてるかも知れない。でも、そのフェルミ原発がメルトダウンした。

フェルミ原発は高速増殖原型炉です。皆さんが、仏様を敬った「もんじゅ」という名前、どっかで耳にしていると思います。福井県にある「もんじゅ」や「ふげん」も廃炉になった「ふげん」の、その先輩の高速増殖原型炉です。そこで作られた電気は、デトロイトとその周辺に供給するという、PRはそういうふうになっていたけれど、実際は

アメリカ国防総省のプルトニウムを作る、ついでに、電気ももしかしたら作るかも知れないけど、基本的には高速増殖炉は、みんなプルトニウム作りの炉です。プルトニウムは再処理工場のPR館のベテンそのまま真に受けている人は、それが燃料だと思うかも知れないけど、基本的には核兵器の原料、最高級の核兵器の原料のプルトニウム。そのフェルミ原発1号機がメルトダウンした。

メルトダウンしたということは、ミシガンの一般市民には伝えられなかった、隠ぺいされた。爆発しなかったので隠ぺい出来た。大量に放射性物質をエリー湖に漏らしたわけじゃなくて、いつものように少し漏らして、あるいはいつもより少し多めに漏らしたかも知れないけど、メルトダウンしたものは、大部分は中に止まった。隠ぺいして5年ほど経ってから明るみに出たので、僕がもう小学校に上がろうとしている時に、デトロイトの警察は、どうやって市民を避難させるかということを発表寸前まで行っていた。それで、いかに過酷な事故だったかということが、だいぶほとぼりが冷めてから明るみに出た。

ほとぼりが冷めたと言っても、プルトニウムの半減期は2万4,000年です。本当の意味でのほとぼりは、なかなか冷めない物質です。自分は中学生になって、フェルミが実はメルトダウンしたんだ、メルトダウンしてそのまま閉鎖して、そこに何も作らないで、葬ったそのままにしていると、イメージが良くない。原発が儲かる分野だというふうに見せかけたい人たちは、フェルミを放っておく選択肢しかなかったのです。フェルミ2号機は1号機がメルトダウンした所のすぐ隣で作ってすごいと思うんですけど、それを80年代に作って1988年に動きだした。

日本語に出会い、日本語を学んでから、こういう現象を表すびつたりの表現があるということを知ったのです。英語にはない表現ですけど、“性懲りもなく”という日本語です。見事な表現です。“性懲りもなく”2号機を作ったのです。今は、また“性懲りもなく”3号機を作ろう

としている。認可まで出ている、ミシガンの市民は必死になって、私の友人たちも闘って止めようとしています。この“性懲りもなく”ってなんだろう。だって1号機がメルトダウンしたら、その隣で2号機を作って、あり得ない。常識の範囲内で考えるとあり得ないと思いますが、でも作った連中の身になって考えると、少し分かります。

フェルミ1号機の高速度増殖原型炉を作ってメルトダウンさせた連中の身になって考えると、そのままにしておくということは「敗北」という形が、エリー湖の畔に出来てしまいます。作ってメルトダウンさせて、想像を絶する予算をブラックホールのように吸い込んで、それで終わりって、そういうふうにしたくないのです。敗北を認めたくない、これイメージ戦略なのです。

イメージ戦略で彼らは一所懸命に継続させるかということを考えて、それで必死になってフェルミ2号機を作る訳です。電気が必要だからとか、原子力を作ると電気が安いからとか、そういう次元の話じゃない。彼らは必死になって、この利権の維持と自分たちの権力の継続を狙ってやっている。後は、全部、後付。どういうふうに電力のコストを計算するのか、それは統計学のみやかしで、いくらでも、どうにでも出来ます。

そういう所に僕は生まれ育ちました。そういうことを、ある部分はちょっと見抜いていたかもしれないけど、本当に大事なところは理解できずに育ってしまいました。僕は、フェルミ原発の1号機の高速度増殖原型炉がメルトダウンしたという、とんでもない失敗だったということは知っていた。

でも、そのフェルミ1号機の高速度増殖原型炉が、なんのために存在していたのか。そして、プルトニウム作りという本当の存在理由がなんなのか理解したのは、日本に来てからです。アメリカにいて、ずっと英語で世界を見ていたら、多分僕は、深く掘り下げることは出来なかったと思います。日本に来て、最初は東京都に住み、そして青森県に来るようになって、広島県にも行くようになった。広島市では、今から70年前の8月6日の朝、

街の上空で引き起こされた核分裂の連鎖反応をもろに受けた人たちの話を聞きました。勿論、もろに受けた人々は誰も生き残ることが出来なかったけれど、奇跡的に影の所に立っていたとか、ちょっと地下室に入っていた。その時は、建物の中にいて、その建物が崩れた時に潰されなかったとかで、奇跡的に命を繋げて、そして語り継いできた人たちの話を沢山聞きました。僕はそこで初めて、自分の生まれ育った国、地域の原子炉がなんだったのか。そして、これから生き残るために何が必要なのかということも教わったような気がします。

初めて広島市に行った時、僕は日本語を5年近く学んで、少し日本語でもものを書いたりもしていました。例えば、原子力発電所、原子爆弾、原爆、あるいは核兵器、核分裂という、そういう言葉は、僕はもうみんな日本語で覚えて、使えるようになっていました。ですから広島市に行った時、何か新しい言葉を覚えるということよりも、広島市で起きたことを、広島市に立って見つめたいなという思いがありました。広島市の街を歩いて、原爆ドームと呼ばれる建物を仰いで、その後、平和記念資料館に入って、その展示物を見ようと思って入ったんですけど、入口でスタッフの方が「今日は体験者の話を聞く会があるので、もし良かったらどうぞ、参加は自由です」と言われて、そのタイミングが合って、生まれて初めて、本当に体験した人の話を聞くことができました。

その語ってくださった女性は、8月6日の8時15分頃、広島市内にいて、その核分裂の強烈な光を見て、その瞬間も含めて、その一日のことを語ってくださいました。僕の知っている核兵器とか原爆という言葉は、彼女は使いませんでした。彼女は僕の知らない日本語、いままで聞いたことのない日本語を使った。「ピカッ」、少しこう、「ッ」が入るような「ピカ」。「ピカッ」という言葉を僕はそこで初めて聞いた、物語の中で、その体験を語る途中に出てきたので、意味はすぐ分かりました。その女性の体に降りかかってきたかということも、その話で分かったので、ピカという言葉の

意味はすぐ分かりました。こういう擬態語で、ウラン235の核分裂を表すことが出来るということ、それは僕にとっては大きな発見でした。勿論、ピカピカになるまで磨くとか、ピカピカ光るとか、そういう表現は知っていた。

「ピカ」という言葉は、意味的には分かっていたけど、これが核分裂の連鎖反応を表すことを広島市で知って、それから平和記念資料館の展示物を見て回っていたら「ピカドン」という言葉も出てきた。「ピカドン」と「ピカ」、2つの新しい単語を広島市で覚え教わって、この2つの単語を東京都に持ち帰って、友達に広島市の話をしたり、その当時、一緒に仕事していた人たちにも、広島市でこういう話を聞いたという。僕が、そこでちょっと、広島市のことを語る機会があり、原子爆弾、核兵器という言葉を使わないで、「ピカ」という表現を試してみました。どうしてか、僕は新しい単語が手に入ると、むずむずして、すぐ使いたいのです。もう使わないと、ずっとそれが気になってしまいます。使って、だいたい失敗して、また使ってみて何回か使っている内に自分の道具になって行きます。

「ピカ」を使いたくて、東京都に戻って使ってみた時に、何か違う感じなのです。その違いも、最初は何かから出てくる違いなのか。最初、分からなかったんですけど、自分が「ピカ」と言った瞬間に、不思議に、目が上に行くということを感じました。原子爆弾、原爆、あるいは核兵器という日本語に翻訳された言葉を使う時に、自分の視線、自分の目がどこにいくかって、一度も意識したことはありませんでした。英語のAtomic Bomb、それからNuclear Weaponという言葉も全然、その、視線とか、自分の見る方向に何か影響があると考えたこともなかった。でも、「ピカ」という言葉を使って、「ピカ」と言った瞬間に、自分がちょっと上を見る。そういう衝動に駆られるって、え、なんだろうと思いました。

最初はAtomic Bombを表す、もう1つの日本語、「ピカ」のほうが感覚的だと思いました。「ピ

カドン」、擬態語、擬音語を組み合わせた表現だから、原子爆弾というふうに直訳された。この Atomic Bomb と比べて、「ピカ」のほうが感覚的な表現だと思っていた。使ってみてその感覚が違う、そういう印象よりも、自分の使っている自分の立ち位置が違うというふうに思ったのです。原爆と言っている自分、原爆と Atomic Bomb しか知らなかった自分は、全く意識はしていないけど、「ピカ」を使って、自分がちょっと上を見るときに、「ピカ」はどこに立っているか、すごく明確なのです。「ピカ」と言ったら、それは広島市の街に、しかも街の中心部の上空 580 メートルの所で核分裂の連鎖反応が起きる。そうすると、広島市にいる生きもの、広島市にあるものは、全てそれとは無関係でいられなくなる。その瞬間に熱線と放射線が発せられて、すさまじい破壊力、しかも中性子をもろに浴びるといふ、そういう現象なのです。

ですから、「ピカッ」という瞬間に、人間だけじゃなく、全ての生き物が、その「ピカ」の方向に目がいった。その瞬間に命を絶ち切られた生き物が沢山いた。「ピカ」という言葉と「ピカドン」という言葉は、僕は同じものだと最初は思いましたが、平和記念資料館に「ピカドン」というタイトルの本もあって、「ピカドン」と言う人と「ピカ」と言う人もいる、「ピカ」って、原子力発電所を原発と略すような感じで、これもそのように訳しているのかなと。あるいは、こっちのほうがちょっと強い感じかなと思って。うそと、嘘っぱちみたいな、そういう使い分けなのかなと思っていました。感覚的な言葉だというふうに思い込んでいました。

ところが、広島市の人々の話を聞いていく内に、「ピカ」と「ピカドン」は全然違うということが分かった。「ピカ」と「ピカドン」は、同じウランの核分裂を表しているので、ウラニウム 235 の核分裂の連鎖反応、広島市で引き起こされた連鎖反応という意味では、Atomic Bomb も原子爆弾も原爆も核兵器も、そして「ピカ」も「ピカドン」

も全部同じです。同じものを、同じ現象を表している。でも、「ピカ」と「ピカドン」は、はっきりと線引きがあって、「ピカ」っていうふうにする人と、「ピカドン」というふうにする人がいて、殆ど重ならない。「ピカ」と言う人は「ピカ」と言うのです。「ピカドン」という人は「ピカドン」。あの『はだしのゲン』を世に出した中沢さんは、「ピカドン」と言わないのです。「ピカ」だと。「ドン」はないって、本人も言われていました。

それは何が違うのかと。これを理解するのに何年もかかりました。ある体験者が教えてくれて、「ピカ」は近い人。1キロ、2キロ、3キロも離れてない人々はみんな「ピカ」。もうちょっと離れている3キロ、4キロ、5キロ、10キロ、20キロのところまで体験した人は「ピカドン」。なんでこうなるかという、ウラン 235 の核分裂が引き起こされると、放射線と熱線が発せられて、そのすさまじい熱、そのすさまじいエネルギーによって、上空の 580 メートルの所の、その周りの空気がものすごく急速に、その空気が熱せられます。100 万度の熱が中心で発生する訳ですから。何万度、何千度という想像を絶する熱が、そして放射線も発せられる。そのときに空気がすさまじく膨張するわけです。

空気は熱くなると膨らみます。それはもう、熱くなるなんてもんじゃないから、その空気が空気におつかって、その膨張しようとする空気が、音の速度、音速よりも速いスピードで、四方八方に広がって行きます。その空気が空気におつかって圧縮されて、コンクリートのような空気になっていく。そのコンクリートのような空気が、音速よりも速いスピードで四方八方に広がるから、ピカ、ピカッと光って、上に視線が動いた次の瞬間に、音よりも速いスピードで衝撃波が来る、その空気のトラックがもろにおつかって、みんな意識を失う。多くの人は意識を失ったまま、命も失った、奇跡的に意識を失ったあとに、また意識が戻った人たちは、みんな「ピカ」なんです。どうしてかという、ドンは聞いていないんです。音速は遅

いので後から来る。だから、ピカの次の瞬間の衝撃波で意識を失った人は、ドンは聞いてないんです。中沢さんも含めて『はだしのゲン』は、ドンは聞いてないのです。でも、3キロ、5キロ、10キロの所にいた人たちは、衝撃波は感じているけれども、音も意識を失わない、失わなかったので、ドンも聞いているから、「ピカドン」になる。

つまり、「ピカ」と「ピカドン」は、感覚の違いとか、生ぬるい主観的なものじゃなくて、これは科学に基づいた観察から得た結果なのです。「ピカ」と「ピカドン」は、同じように見えて、実はすごく細かい科学的な違いがあって、この言葉こそ、科学的な正式名称なのです。広島市の人々は、ピカッという瞬間を捉えて、「ピカ」というわかりやすい日本語で表して、1945年の8月6日の朝に、この2つの造語を世に出して、これは広島市の人々があの日の昼までに作って、次の日には、山口県とか、島根県にも伝わっていました。3日後にプルトニウム弾が長崎市で使われた時に、この2つの単語は長崎市に既に伝わっていました。新型爆弾じゃなくて、長崎市の人たちは「ピカ」と「ピカドン」と呼んでいます。

この言葉を28歳の時に貰った僕は、この言葉から、自分の立ち位置をやっと掴むことが出来ました。自分の人生の前半、どういうふうの世界を見ていたのか、どういう立ち位置から自分が、その核分裂の連鎖反応、あるいは核物質の危険をどういうふうに見ていたのか、よく分かったのです。僕はミシガンに生まれ育って28歳になるまでは、ずっと上から目線だった。自分が被爆者なのに、だって僕はミシガンに生まれ育って、エリー湖で泳いでいるから、フェルミやデービス・ベッセや原発と核開発施設が漏らした、その核種に晒されたことは間違いない。だから僕は被爆者、でも自分が被爆者であるという認識がない、別に具体的に健康上でもなんか困っていることもないから、実感がなくて確実に被曝している。

自分の地元のフェルミ原発が、自分が母親の胎内にいた時にメルトダウンしているということも

知っている。知っているけど、引き受けてなかったのです。引き受けているつもりだったかもしれないけど、自分の立ち位置が分からない。だって、上から見ていたんだから。自分が風下に置かれている筈なのに、自分とは直接関係ないという。どっかそういう勘違いがあった。で、原爆に至っては、もう完璧に上から目線なんです。だって僕はこのAtomic Bombという単語を使っていた。Atomic Bombという言葉を使うと、どうしても上から目線になる。この言葉を作ったのは、アメリカの陸軍省の、その核開発プロジェクトの人たちなんです。まあ、ゼロから作った訳じゃなくて、実は、文学者が最初にこういう言葉を生み出して、いろんなサイエンス・フィクションの作品に、実は出て来る、この言葉に乗っ取り、そしてこの言葉をアメリカ国民に、イギリス国民に、世界の市民に浴びせたのは、核開発を進めて、広島市のウラン弾と、そして広島市のウラン弾よりはるかに威力のある長崎市のプルトニウム弾を作った人たち。彼らがこの言葉を選んで、そして、この言葉を正式名称にして、みんなに使わせたのです。

ですから、この言葉には爆撃機のエンラ・ゲイから見下ろして、そしてキノコ雲が、こう昇ってくるような、そういう視点が組み込まれています。キノコ雲っていいですよ。Mushroom Cloudって、そのMushroom Cloudのようにキノコに見えるように、あの撮った写真を見るとみんな納得しちゃうのです。ああなるほどキノコ雲だって。そのキノコに見えるような角度からあの写真を見ると、みんなそれで納得して、この言葉をなんの疑いもなく使うのです。

ところが、「ピカ」という言葉を教えてくれた人、「ピカドン」という言葉を使っている人とずっと話していると、あのキノコ雲という言葉は一切出てこないんです。キノコ雲は英語からの直訳です。でも、キノコ雲は広島市の人たちの話の中に出てこない。どうしてか、キノコじゃないから。キノコに見えるためには、遠く空の上から落とした側の視点で撮らないと駄目。或いは、ずっと風

上に立って、遠くから人ごとだと思って撮ると、キノコ雲になるのです。広島市にいる人たちは、キノコ雲じゃないのです。地獄ですよ。真っ暗闇の地獄の中で、みんな被曝させられて、体は焼かれて、それで必死に生きようとしている。キノコなんて、そんな例えが全く成り立たない状況なのです。ですから、僕がなんの疑いもなく使っていた Atomic Bomb とか、Mushroom Cloud とか、Nuclear Weapon というのは、みんな正式名称じゃなくて、これは商品名で、上から目線を組み込んだ、その錯覚と一緒に売り込まれた勘違いの言葉だということ、それに気付いたのです。

「ピカ」と言うレンズを貰って、「ピカ」と言うレンズを通して、自分の母国の歴史、自分の生まれ育ったミシガンのエリー湖の畔を見た時に、それがあぶり出されたのです。自分が当事者なのに、自分が被曝者なのに、それを意識もせずに、勘違いに飲み込まれて、ある意味、自殺行為を続けていたのだからということ。人生の前半、どういう自殺行為を続けて来たかということ、行動しないという自殺行為です。僕は、フェルミ原発を食い止める為は何にもしてこなかった。高校生の時に立ち上がって、フェルミ原発2号機も“廃炉にしろ”という運動、やれば十分出来たのに、でもしなかった。フェルミ原発の問題を車で通って冷却塔が見えるのに、何もしてこなかった。正に、行動しないことが自殺行為だった。

このことをどうして言えるのかというと、例えば、アメリカのニューメキシコ州には、被曝者が沢山います。ニューメキシコ州にどうして被曝者が多いのか、しかも2世、3世、ずっとその被害が続いている。どうしてニューメキシコ州という所に被害に遭った人たち多いのか、長崎の「ピカ」を長崎で使う前に、プルトニウムの核分裂の連鎖反応を使った最先端のプルトニウム弾を1発実験として使うことになった。厳密には1945年の7月16日、トルーマン大統領とかバーンズ国防長官が、ポツダムにいて、スターリンを脅かしている時に、あのプルトニウム弾、人類初の原爆です。

広島市よりも早い、もう本当に人類初の原爆が、1945年7月16日、場所はニューメキシコ州。この時、マンハッタン計画のプルトニウム作り、マンハッタン計画の原子炉のプルトニウム作りは、全て極秘です。

この最先端の核兵器を1発、試すことになった。広島市に落とした原爆は実験は知らない。単純で無駄の多い作りだし。例えると、プルトニウムが最先端でスーパーコンピューター、それに対して広島市で使ったウラン弾はタイプライターみたいなもの。年数の違いはそんなにはないのですが、国家予算を全部注ぎ込んで、極秘に作っている、それぐらいの開きがある。このプルトニウム弾は、試さなきゃいけないということになったわけ。だって、本当にこれで成功するかどうか。これを使いたいのです。極秘、それも特定秘密の元祖です。特定秘密保護法の、流れは実はここから始まるのです。極秘に作ったものを極秘に使う。第二次世界大戦はまだ終わっていないし、ニューメキシコ州の人たちは、一所懸命に国のために食糧を作っているし、戦場に行っていない人たちはみんな一所懸命働いている。ニューメキシコは農家が多い。

その彼らが住んでいる地域に、彼らに何にも知らせずに、屋内退避とかそういう通知も何もなく、外で、豊かな生態系があった砂漠の所で、「ピカ」をやるんです。「ピカ」をやったら、勿論、地域住民、みんな気付く。うんと近い所に誰もいなかったというんですけど、でも風下に沢山の人がいて、彼らはみんな通報して、その一報を受けた警察は、前もって軍から貰ったその原稿を読みあげて、「米軍の火薬庫が事故で爆発したんですけど、大丈夫です。皆さん、ご心配なく」と言ったのです。だから、ニューメキシコ州の人たちは、核分裂のプルトニウム、核分裂の連鎖反応が自分たちの地域で大々的に行われていたことを知らずに、永遠に被害が続く、死の灰が大量に降ってくるということも知らされずに、極秘のペテンプロジェクトの犠牲になって、風下で被曝させられた。

「大丈夫ですから、みんな心配しないでくださ

い」と言われて、本当かなと思いながら、農作業を続けた人たち、本当かなと思いながら、洗濯物を干した人たちが、いまだに、その被害を背負っています。やっと去年になって、米政府が調査に乗り出しました。アメリカの国立がん研究所の研究チームが、被曝状況の調査を開始し、69年たつてです。わかりますよね。山下俊一、あの連中がどういう狙いで調べてくれるかって。69年たつて、調査に乗り出すって、これは日本語でなんというかという“死人に口なし”というのです。だから待つのです。みんながいなくなるまで。それが米政府と日本政府のやり方なのです。このことを僕が少し見抜く目を持つことができたのは、広島市の「ピカ」なんです。この言葉が僕を広島市の相生橋に立たせてくれました。

本川小学校に立って、僕は歴史を見ることが出来ました。そこに立って歴史を見ると、あの原爆は正しかったという歴史の定説は成り立ちません。あの、「正しかった」、「必要だった」とか、そういうこと以前に自国民を平気で被曝させる連中は、国を守る資格なんかないです。彼らは日本のこと日本国民のこと、アメリカのことアメリカ国民のことをなんとも思っていないです。被曝させても、なんとも思っていないし、食べ物にしても彼らの食欲は衰えることないし、骨までしゃぶる人たちです。その骨まで被曝させてしまう。だから、僕らは彼らが言う「ただちに影響はない。経済効果がある。日本のために必要だ。アメリカのために必要だ」、そういう言葉に一切惑わされずに、現実を見つめる必要がある。それがなかなか難しい。

現実を見つめようとする、新聞を見ます。現実を見つめるために情報が必要です。東奥日報を読んだり、東奥日報はまだいい方です。あの“ゴミ売新聞”を読んだりするよりは良い。あ、間違えた、読売新聞でしたね。そういう新聞を読もうとしたり、或いは大手マスコミのテレビとかラジオとかで、いろんな所から情報を得ようとする。だって現実を見つめたいから、情報を得なきゃい

けない。ニュースを見て考える。ニュースが流れて来る、そうすると、何が出てくるかというと、「日経平均の株価が15年ぶりに最高値をつけて、日経平均の株価が上がって1万9,000円の大台に乗せて、終値として15年ぶりの高値」だとか言います。で政府は「あれはアベコベのミクスの効果だ」と言ってね。ああ、アベノミクスですね。それが一つの情報になる。平均株価、日経平均株価が、そういう統計として出て来る、これも情報なのです。

でも視点を変えると、この情報が如何に巧妙で薄っぺらなまやかしかが分かるのです。これは実際のグラフとは違うのですが、これが例えば、日経平均の株価の1年2カ月の動きだとするでしょう。こう上がっています。随分上がっている。経済成長だ、景気がいいって。ところが、この時は円高です。日本円は僕らが日常的に使っているお金だから、僕らにとってはお金というふうに感じられますが、世界の巨大なマネーを動かしている人たち、この原発とか、プルトニウム作りとか、日本の原子力村の上において、日本の原子力村を操っている人たち、金融と為替を操作している人たちから見れば、円って何かというと、地域通貨、商店街の商品券みたいなもの。新町通で使える共通商品券が円です。

世界の基軸通貨はドルです。ドル、これは良いか、悪いか、悪いに決まっているのですが、僕の母国のドルが、世界経済の基軸通貨になっている。世界の経済を操っている人たちは、食糧とか、金とか、価値のあるものを狙って、どんどん食い荒らしています。マネーを捉えるときはドル。ですからドルを基準にして株高を見なきゃいけない。ドルと円の為替レート、皆さん、注目していますか。ドルと円の為替レートを見ると、絶望的に円が暴落しています。日経平均が上がっている間、ずっと円が下がっています。円が下がるということは、ドル建てで世界の基軸通貨で見ると、皆さんの富が減っているということです。

ですから安倍政権になって、皆さんの富の1/3

が消えて、良かったですね。物価が上がって、生活が苦しくなった。アベノミクス、アベコベのミクス、素晴らしい。ドルに直してごらん。日経平均の株価、そうすると分かります。経済成長なんかしていません。株価は円安の錯覚、円安の錯覚だけだったら、まだ良い。ドルと円の為替のマジックです。この手品であると同時に、巨大な年金機構とかが、株をじゃんじゃん買っています。

これは政府が仕掛けた公的資金の悪用によるバブルなのです。バブルと為替の手品、2つの手品を合わせて、「今の日本経済が好調だ、デフレ脱却だ」とか言って、日本を安く売っています。この中で、情報を得て大事なことについて考えようとすると、その情報はもう最初からまやかしのので、情報として真に受けられないのです。その情報を見抜いた上で考える必要があります。

見抜くために、役に立ついろんな情報が、少し漏れて来ている感じもします。マスコミはこの情報を大きく注目しませんが、でも出て来ます。探せば役に立つ、そして原子力のペテンも含めて見抜くために必要なものが出てきます。例えば、昨日配信された記事ですけど、世界銀行の総裁が記者会見をして、「原発はリスクが未知数なため、世界銀行は投資の対象にしない」と。世界銀行は一切、原発に投資しないということを堂々と総裁が発表している。でも“あんぼんたん”安倍総理は再稼働すると言っている。“あんぼんたん総理”は大間町も作るというんです。世界銀行も投資の対象にはなり得ないと言っているのです。また、世界銀行総裁次のようなことも言っています。「地熱、火力、水力などのクリーンエネルギーへの投資を拡大すべきだと考えている」と。世界銀行のトップが自然エネルギーの話をしています。もう原発を作る時代はとっくに終わっている。プルトニウムは十分あるのです。時々、リフレッシュして核兵器を作らなきゃいけないって、それは分かるけど、電気を作る戦略的な意味はもう終わっています。じゃあなんで大間町に作るのか。山口県の上関町に今も建設計画を続けようとしているの

か。彼らはもう抜けられないのです。カムフラージュだろうと、誤魔化しだろうと、何だろうと彼らはこれを止められないのです。

じゃあ誰が止めることが出来るのか。彼らには止められないのです。どうしてか、自分たちの、利権以外の存在意義を失って、何が起きても、どんなことがあっても、原発が成り立たないものになっても、やり続ける、もうそこに自分たちの全てを投資しちゃったから。こういうことが個人レベルでも起きます。ある人が酒に溺れて毎日飲んでいて、このまま放っておくと肝臓が動かなくなって、死んじゃうだろう。あるいは毎日毎日、シャブばかり打って、シャブないと生きていけないかわいそうな人がいるでしょう。その人を救うために、多少の荒治療が必要だったりする、場合によってはその人を救うために縛っておいて、禁断症状が治まるまで続けないといけない。

僕らが相手にしている“あべこべ政権”は、もう禁断症状が現れている。もう縛る必要があるのです。沖縄県でやっていることも、正にその現れなのです。沖縄県や大間町でやろうとしていること、六ヶ所村でやろうとしていることは、もう現実と何処をとっても噛み合っていません。もう行き詰まって終わっているのです。終わっているけれども、彼らはその終わりを認めることが出来ないで、僕らが諭さなきゃいけないのです。優しく、非暴力的に、悔い改めさせて、彼らが真人間に戻れるようにしなきゃいけないんです。これは思いやりで人道支援です。

僕自身は、どじょっこだの、ふなっこだのが大事で、彼らの命もずっとこれからも見つめて、自分の問題として捉えたいんですけど、どじょっこが苦手な人でも、ふなっこなんかどうでもいいと思っている人でも、実は日本国民全員の大事な問題で、この袋小路から早く抜けることがとても重要です。ですから、この今日の集まりは、多分マスコミは無視するのだろうけど、もし親切にマスコミが取り上げたとしても『反原発集会』とかいうのだからね。僕、全然、反原発じゃないです。僕

は、あの、どじょっこ推進派です。皆さんも、多分心の中から、何か反対じゃなくて、皆さんは青森県を愛し、津軽海峡を愛し、この日本という国を愛して、こういう形で行動していると思います。

僕らの愛情の対象は、安倍政権も含まれています。その道を踏み外して、シャブ中毒に陥って禁断症状まで出ている、この末期的な彼らも救うために、これから皆さんと一緒に闘っていきたいなと思います。どうもありがとうございました。

大間原発に反対する会—奥本征雄さん



私は今、鹿児島県の川内原発再稼働の動向と、大間町で建設中の大間原発のこれからの行方について、全国で反原発で闘っている仲間、脱原発に向かって行動を起こしている仲間たちは勿論のこと、福島県を知っている全世界の人々の目が、日本のこの国の北と南の2つの原発に注がれていると思っています。人口5,800人の大間町は、いま静かです。去年の暮れの12月16日、電源開発は原子力規制委員会へ大間原発の適合性審査の申請書を出しました。それから3カ月がたちました。やっぱり今、大間町の夜の街も静かです。ご承知のように、大間原発は、世界で初めてのフルMOX原発です。フルMOXかどうかは別にして、そもそも原発の適合性とは、いったい何を意味するのでしょうか。

事故から4年が経過しました。今なお、溶け落

ちた燃料の所在すらつかめていない。福島県の現実を見るにつれ、新しい安全神話のためのセレモニーに過ぎないのではないかと、私は思っています。今回の申請で電源開発が、2021年運転云々を言っていますが、地元では誰もそれを信じていません。それよりも、原発を止めるいい機会ではないのかというような声が、住民の中から少なからず聞かれます。

これまで安全・安心を言い続け、推進してきました。商工関係者や漁業組合、それから町の関係者の中から、一部ではありますが、何を今さらという声と共に、原発に依存することを止めて、もう一度、自分たちの手で何が出来るのかを考えないと、漁業も町の未来も危うくなると、口にする人さえ現れて来ています。

むろん、依然として根強い推進論者もいます。甘い汁に漬かった地元ならではの経済評論家たちも、まだ健在です。30数年の長きに亘って、洗脳同然に教え込まれた安全神話、経済神話に支配されてきた原発城下町では、それを変えることは、生き方を変えるということと同じですが、そうしない限り、失われた環境と壊された人間関係を取り戻すことは出来ないと、私は思っています。だから、これからも、皆さんと一緒に原発反対の輪のなかに一日でも長く立ち、一日でも長く反対を言い続けるために頑張っていきたいと思います。

花とハーブの里—菊川慶子さん



ずっと、アーサー・ビナードさんのお話を聞いていて、私の言いたいことを全部言ってくださったと思います。残念ながら、六ヶ所村は今、やっぱりまだまだというか、本当に核燃城下町なので、止めようという声は、公にはなっていません。私はこの春、村議選に出るために、ずっと秋から戸別訪問をしています、その中では、いろいろな人たちとお話をする機会がありました。そういう中で、私が話をするよりも前に、皆さんもその集会を覚えていて、頑張りましょうとか言ってくださるのですが、そういう人たちは、年配の女の人たちなのです。男の人たちは、なぜか、核燃を止めると、六ヶ所村は生きて行けなくなる、そういう人たちが多い様です。

今後どうしたら良いのをいつも考えてしまいます。でも六ヶ所村の中で、若い人たちは、こういう場所に来るほどの意識はないけれども、でも核燃は危ない、放射能は怖いという人は沢山います。そういう人たちに、どう話していったら良いのかということ、六ヶ所村にいて考えます。でもその人たちがいないと、次の世代は育たないと思っていますので、その若い人たちは、「放射能が怖いと思っているけれども、自分は反対運動はしたくない」と明言します。その人たちをどう説得したらいいのかということ、本当に考えてしまいます。でも私たちが言っていないと、この問題は止まらない。今、六ヶ所村に放射能のゴミはいっぱいあります。その放射能のゴミを、私たちはどうしたいのかということ、本当に考えて、決めていかなければいけない。

今、そのゴミをどうしたら良いかをずっと考えていますが、答えは見えないままです。私たちが今出来ることは、これ以上、放射能を増やさないことです。その放射能を増やさない為には、再処理工場を動かさない、廃炉のゴミも六ヶ所村に持ち込ませないと思っています。そういうことをしていけない限り、していったとしても、放射能は残るのですが、でも、今あるところに、今あるものを、そのままの形で管理すること。それだけが

私たちにできる最善のことだろうと思います。今日、こんなに沢山が集まっているとは思わないで会場に来ましたが、皆さんと一緒にこれからも反対運動、私にとっては、本当にそのままの暮らしなんですけど、続けていきたいと思っています。

核の中間貯蔵はいらぬ下北の会

—野坂庸子さん



原子力関連の資料を調べていて、もう昭和30年代には下北にそういう話があったということを知り、私は昭和22年生まれですから、もう物心がついた時にはそういう原発の話が出ていたのだなということを改めて思いました。むつ市は、原子力船むつ、その時から私たちは原子力と関わってきました。ここにお集まりの皆さんのなかには、その原子力船むつの反対運動も、一所懸命なされた方も沢山いらっしゃると思います。最近、私たちの仲間の所に、若い方が東京の方に行ってから、あの原発事故の後から、下北には原発が2つ、そして使用済燃料中間貯蔵施設が1つ、更に六ヶ所村にも、原発のゴミがあるということ、他の人から言われて、初めて自分が生まれ育った所にそういうものがあるということを知ったという話を聞きました。私たちは若者にそういう施設が青森県にあり、これだけPRして来たにも係わらず、若い人たちに伝わっていなかったということ、私たちは肝に銘じました。

大間原発訴訟の会（函館市）一竹田とし子さん

今、私たちは一所懸命、反対運動をいっているけど、実は誰に伝えていかないといけないのかを、その時、私たち仲間で話し合いました。じゃあ若者たちに一所懸命声を掛けて行こうという思いが募ってきました。今、むつ市では、原発に反対する団体が幾つかあって、一緒に金曜行動をしています。

その中で、私は、核のゴミは、何万年先まで保管をしなければならない。現在、電気は大人たちが便利に使っていますが、そのゴミは、将来の孫だけに止まらず、ずっとずっと先の子孫にまで、その管理を委ねなければならないということ。今、私たちは便利に使っている電気を、今、私たち大人がどうしなきゃいけないこと、やっぱり話し合うべきだし、自分の問題として電気のことを考えてみませんか、今、一所懸命、問い掛けています。むつ市に住んでいる若者たちが、こんなに下北に原発関連のものがあることを全然知らない。誰も教えてくれなかったという。その言葉が私の心に残っています。

今、大人がすべきことは、あれだけの反対運動をした大人たち。やっぱり、次の世代にきちんと、そのことを、なぜ反対したのかを伝えて行く必要があると思います。便利な電気を使い、そのゴミを次世代にまで管理をお願いしなければならない。そういうものは絶対に作ってはいけないし、稼働してもいけない。今あるゴミについては、政府はいつも先送りです。政府は今、ゴミ問題をもっともっと真剣に考え、そういう危険なゴミが残らない再生エネルギーを、もっともっと前から考えて欲しかったと思います。

原発一辺倒できた政府には、本当に腹が立ちます。自然エネルギーを開発で出来るよう、私たちもその方向を応援して行きたいと思います。将来の子孫たちに絶対にゴミ問題で苦労させたくありません。子どもや孫、そしてその先の子どもたちに未来を残したいと思います。



月1回函館市内でバイバイウォークという名で大間原発建設の反対のデモをやっています。そして、函館市から見える大間町、あそこに原発が出来る、それは大間原発と言うものではなく、函館原発とも言えるものだというふうに、東京の弁護士の河合先生が言っていました。

壇上の旗はネパール語ではタルチョ、チベット仏教で、祈りを込めて5色の旗を作っています。最近、私たちは、このタルチョに着目して、大間原発を止めたいという願いを書いて、皆さんにメッセージを書いていただいて、これをシンボルにしたいと思っています。

函館の市民は、みんな、大間原発に反対しています。私たちは原発を、何としても、子どもたちに残してはならないと反対しています。函館市の町会連合会が大間原発を止めたいと署名活動をしています。40日間で14万人以上の署名を集めました。今、まだ署名を集めています。それから、今週3月19日には東京地裁で函館市が訴えている訴訟があります。3月27日には、函館地裁で、私たちの第15回目の訴訟があります。皆さん、裁判と馬鹿にしないで、ぜひ傍聴に来て下さい。そこで一所懸命、弁護士が考えて、なんとしても止めたいという私たちの思いを裁判長につけています。あの大飯原発のように、良い判決が得られるように、また大間原発が止まることを祈って、是非ご協力をお願いします。今日、私は、原告募

集の紙を少し持ってきていますので、この後でも、原告になって下さる方、私の所からその紙を貰って行って下さい。一緒に頑張っって止めたいと思います。

閉会の挨拶



浅石紘爾共同代表

本日は、1,200人という大変多くの皆さまにご参加いただきましてありがとうございます。心から御礼申し上げます。

特別講演をしていただきましたアーサー・ビナードさんには、遠方からおいでいただきましたことを、お礼申し上げたいと思います。ビナードさんのお話の中で、反対の声を挙げないということは自殺行為に等しいんだ、というお話、今日お集まりの皆さま、多くの人々にお伝え頂ければと思っています。

それから、各地からのご報告をいただいた4名の皆さまにも、感謝申し上げなければなりません。4名の皆さんの今後のご健闘を心からお祈りいたします。とりわけ、函館市からおいでいただきました竹田さん、そのほか住民の皆さまにも、遠路おいでいただきましたことを感謝申し上げます。大間の裁判、六ヶ所村の核燃サイクルの方も裁判があります。どうか皆さん、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

今日のビナードさんのテーマは「津軽海峡・核の冬景色」という題でしたが、石川さゆりの「津軽海

峡・冬景色」、私は大変名曲だと思っているものの、この歌のお陰で青森県は、他県の人たちから大変暗いイメージを持たれているのではと思っています。

そういう意味で、一年中、雪が降っているのではと見られている所もあるのでは。しかし、雪が溶ければ野にも山にも、命の芽吹く新緑の春が巡って来ます。青森県は大地も海も大変自然に恵まれた、いい所が沢山あります。食にしてもリンゴ、ニンニク、大根、米、そして海の幸、大変美味しい物が沢山取れます。大変住み心地の良い所と考えております。

一方で、多くの核の施設を抱えております。一旦この施設が事故を起こした時は、黒い雨ならぬ、黒い雪が私たちの頭上に降りかかってくる。福島県には帰還困難区域が指定されていますが、我が故郷の青森県が同じ事態に陥らない保証は何処にもありません。故郷の再生はあり得ない、こんな青森県を私たち、私は想像したくありません。二度と福島県の悲劇を繰り返さない為に、今日の集会を契機として、また明日から皆さんと一緒に原発、核燃のない社会を作っていくために邁進して行きたいと思っています。

この後でデモと青森県庁包囲がございまして。原子力政策を推進する巣窟である青森県庁の前で、私たちの怒りの声と、直ちに原子力政策を止めろとの意思表示をしっかりと伝えて、今日の集会を閉じて行きたいと思っています。よろしくお祈りいたします。

以上



YAMさんの太鼓に合わせデモコール練習

決 議

【決議の趣旨】

- 1 国は現行の原子力政策を見直し、再生可能エネルギーなど環境にやさしいエネルギー政策に転換すること。
- 2 次のようリスクと不合理性を内在する六ヶ所再処理工場を即時廃止すること。
 - ① 大量の死の灰をばらまく未確立の技術
 - ② 使い道のないプルトニウムを製造し、過重なコスト負担を国民に強制
 - ③ 余剰プルトニウムを更に累積させ、核不拡散に逆行
 - ④ 放射性廃棄物とりわけ高レベル廃棄物（高レベルガラス固化体や使用済燃料）を子孫に残す無責任さと倫理感の欠如
- 3 プルサーマル計画は直ちに中止すること。
- 4 原子力発電所の再稼働をやめ、速やかに建設中の原発を含む原発廃止の政治的決定をすること。廃炉のゴミは、各原子力発電所で安全に管理すること。
- 5 原子力発電所の新增設及び更新をやめること。
- 6 使用済燃料は再処理することなく直接処分し、最終処分までの間は、安全な中間貯蔵方策を確立して保管すること。
- 7 青森県知事は、青森県内の原子力施設に関し、以下の措置を講ずること。
 - ① 原子力マネー依存から脱却し、地域再生・強化の政策に転換すること。
 - ② 国に追随せず県独自の安全性の検証を行うこと。
 - ③ 住民重視の実効性ある原子力防災計画を確立すること。
 - ④ 原子力施設の立地及び運転の是非は県民投票によって決すること

【決議の理由】

2011年3月11日に起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故では、原発の周辺はもとより、広い範囲に放射能汚染が拡がり、多くの人々が故郷や家族、仕事という生活基盤を奪われ、農林水産業の未来をも根底から揺るがす事態となっています。4年目を迎えた現在でも、福島県では未帰還者が約12万人を数え、未だ原子炉の内部は不安定で、放射性物質の拡散は食い止められず、除染の目処もつかない厳しい状況が続いています。

いつ大地震に襲われるとも知れない狭い日本に、原子力発電所を運転しないと停電が起きると脅しながら、54基もの原発を作り、それを維持するための六ヶ所核燃料サイクル施設まで建設しました。その先には、高速増殖炉の時代が来ると宣伝して、原型炉「もんじゅ」での実験も続けてきました。

しかし、現時点で原発は全基運転停止中であり、それでも電気の供給に困ることはありません。そして、国民の税金を無駄遣いしてきた「もんじゅ」での高速増殖炉開発は中止になりました。既に約47トンの余剰プルトニウムを抱えており、プルトニウムを抽出する再処理工場を運転する必要性はなくなったの

です。電力会社は、軽水炉によるプルサーマルでプルトニウムを使い切るとしてありますが、その許可を取るのに原子力安全・保安院によるヤラセが横行したことが明らかになりました。原発現地の住民の多くはプルサーマルに反対しており、再度民意を確認し、安全性、経済性に劣るプルサーマル計画は白紙に戻すべきです。

原発の運転で使用済核燃料が出ますが、国や電力会社は、「再処理すれば、核のゴミの量が減る」と言います。しかし、実際には膨大な核のゴミの量が増えることを隠しています。とりわけ危険な高レベル放射性廃棄物であるガラス固化体の処分方法は解決の目途が全く立っていません。既に貯蔵している青森県以外、どこの自治体からも受け入れる意向は示されていません。そして、今も我が国の再処理工場で冷却貯蔵されている高レベル放射性廃液は、約 51 時間以上の停電が継続すれば沸騰爆発し、日本を壊滅させるほど危険なものです。しかも、ガラス固化技術が確立しておらず、私たちは、日々事故発生の脅威に晒され続けるのです。

結局のところ、再処理工場は私たちの血税を湯水のように使って、人類が手に負えない核のゴミを増やし、使い道のないプルトニウムを増やし続けるだけの危険施設です。特に、再処理工場で抽出される MOX は核兵器に転用可能であり、アジアの国々に対して不要な緊張感を与えるだけです。こんな再処理工場は、1 日も早く廃止しなければなりません。

これまでの原発の運転で出た核のゴミと、これからの廃炉で出る核のゴミは、未来の世代にも大きな負担になることは避けられません。ですが、脱原発社会を実現し一日も早く廃炉を決定すれば、核のゴミの管理量を減らすことは可能です。そうすることが私たち世代の責任だと考えます。勿論、新規の原発建設、増設、更新は認めません。

既にある使用済核燃料については中間貯蔵に切り替え、再処理せずに直接処分することが現実的です。そのような方向転換で、少しでも未来世代への負担を軽減する必要があります。

三村申吾青森県知事は、県民からの意見を聞く場を殆ど設けず、閣僚が交代する度に上京して、核燃料サイクルの存続を確認する回数の方が多いというのが実態です。三村知事の県政は国策追従一辺倒で、県民の生命と健康・財産を守るべき知事の責任を自ら放棄し、原子力交付金、核燃料税などの核燃マネーに頼る施策に固執しています。このような県知事に、青森県政をこれ以上委ねるわけにはいきません。青森県の未来を左右する原子力施設の存続については、県民投票による選択に委ねるべきです。

現在、新規規制基準による審査が続いている核燃料サイクル施設、リサイクル燃料貯蔵施設、東北電力東通原発 1 号機、大間原発は、大地震と大津波により、想像を絶する被害が発生する危険性をはらむ下北半島に集中立地しています。どの原子力施設で事故が起きても、下北半島の住民は避難しなければなりません。それを分かりつつ、具体的な対策を講じようとしない知事には、県政の舵取りの資格はありません。

私たちは、本日の集会を再度の出発点として、原発にも核燃施設にも頼らず、未来の子どもが安心して暮らせる青森県にするために闘おうではありませんか。

以上決議する。

2015 年 3 月 15 日

2015 さようなら原発・核燃「3・11」青森集会参加者一同

なくそう原発・核燃、あおもりネットワーク

加入団体

(49 団体・2015 年 3 月 15 日現在)

青森県地域自治体問題研究所	生活協同組合コープあおもり
青森県高等学校・障害児学校教職員組合	生活クラブ生活協同組合
青森県生活協同組合連合会	全日本年金者組合東青支部
青森県生活と健康を守る会連合会	脱原発フットワークあおもり
青森県中高年雇用福祉事業団	中弘南黒地区労働組合総連合
青森県反核実行委員会	TwitNoNukesAOMR
青森県保険医協会	津軽保健生活協同組合健生五所川原診療所
青森県民主医療機関連合会	津軽保健生活協同組合 健生病院
青森県労働組合総連合	津軽保健生活協同組合
青森保健生活協同組合	津軽保健生活協同組合
奥羽教区核燃料サイクル問題小委員会	津軽保健生活協同組合
大間原発反対現地集会実行委員会	常盤村養鶏農業協同組合
核燃サイクル阻止 1 万人訴訟原告団	NAZEN (すべての原発いまずぐなくそう！ 全国会議)・青森
核燃・だまっちゃおられん津軽の会	日本共産党青森県委員会
核燃料廃棄物搬入阻止実行委員会	日本共産党青森市議団
核燃料サイクル立地反対連絡会議	日本キリスト教団八戸北伝道所
株式会社あおもり健康企画	八戸医療生活協同組合
株式会社ファルマ	PEACE LAND
原水爆禁止青森県協議会	福島子ども保養基金
原水爆禁止青森県民会議	放射能から子どもを守る母親の会
健生病院労働組合	社会福祉法人阿部野福祉会 まきば保育園
五所川原民主商工会	みらいアクション青森
子どもたちに核のない未来を実行委員会	民青同盟青森県委員会
下北の原発・核燃を考える会	もりもり AOMORI
新日本婦人の会青森県本部	若竹の会

